

## 第2問

次の文章は、野上弥生子の小説「秋の一日」(一九二二年発表)の一節である。一昨年の秋、夫が旅行の土産にあげびの蔓で編んだ手提げ籠を買ってきた。直子は病床からそれを眺め、快復したらその中に好きな物を入れてピクニックに出掛けることを楽しみにしていた。本文はその続きの部分である。これを読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。また、表記を一部改めている。(配点 50)

「此秋になつたら坊やも少しはあんよして行けるだろ、小さい靴を穿かして一緒に連れて行こう。」

とこんな事を楽しんだ。けれどもその秋も籠は一度も用いらる事なく戸棚に吊られてあつた。直子は秋になると屹度何かしら病氣をするのであつた。その癖一年のうちに秋は彼女の最も好きな季節で、その自然の風物は一枚の木の葉でも一粒の露でも、涙の出るような涼い感銘を催させる場合が多いけれども、彼女は大抵それを病床から眺めねばならぬのである。ところが今年の秋は如何したせいか大変健かで、虫歯一つ痛まずびんぴんして暮らした。直子は明け暮れ軽快な心持ちで、もう赤ん坊を脱して一ツぱしいたずら小僧の資格を備えて来た子供を相手に遊び暮らしながら、毎年よそに見はずした秋の遊び場のそこ此処を思いやつたが、そうなると又特別に行き度いと思う処もなかつた。

その内文部省の絵の展覧会が始まつて、世の中は一しきりその取沙汰で賑やかであつた。直子の家では主人が絵ずきなので早々見に行つて来て、気に入つた四五枚の絵の調子や構図の模様などをあらまし話してくれた。二三の知つた画家の出した絵の様子なども聞いた。直子は去年も一昨年も見なかつたので、今年は早く行つて見ようと思つた。けれども長い間の望みの如く、彼のあげび細工の籠に好きな食べものを入れてぶらぶら遊びながらと云う事を思いついたのは、其前日の全く偶然な出来心であつた。直子は夕方の明るく暮れ行く西の空に、明日の晴れやかな秋日和を想像して左様しようと思つた。

「それが可い。展覧会は込むだらうから朝早くに出掛けて、すんだら上野から何処か静かな田舎に行く事にしよう。」  
とそう思うと、**A** 誠に物珍らしい楽しい事が急に湧いたような気がして、直子は遠足を待つ小学生のような心で明日を待た。

あけの日は何時もより早目に起きて、海苔を巻いたり焼き結飯を拵ったり女中を相手に忙しく立ち働いた。支度が出来ていよいよ籠に詰め終った時には、直子はただ訳もなく嬉しく満足であった。菓子も入れた。無くてはならぬものと思つた柿も、きざ柿の見事なのを四つ五つ入れた。提げて見ると随分重かつた。

「それをみんな食べて来る気かい。」

20 と云つて家の人々は笑つた。

上野の山は可なり久しぶりであつた。直子は新しい帽子、新しい前掛けに可愛らしく装われた子供の手を引いて、人気の稀れな朝の公園の並木道を竹の台の方へ歩いて行つた。小路に這入ると落葉が多かつた。灰色、茶色、鈍びた朱色、種々な木の葉の稍焦げた芝の縁や古い木の根方などに乾びつつ集まっているのが、歩みの下にさくさくと鳴るのも秋の公園の路らしかつた。其処此処の立ち木も大抵葉少なならわな姿になつて、園内は遠くの向うまで明るく広々と見渡された。その葉のない淋しい木の枝に大きな鴉が来て、ぽつつりと黒く留まつてるのが、町中の屋根の端なぞにたまたま見るものなどよりもずっと大きく、ずっと黒く、異様な鳥のように直子の目に映つた。その鴉が枝からかアかアかアと鳴いて立つと、子供も

「かアかアかア。」

25 と云つて口真似をした。女中もその度に子供と一緒にかアかアかアと真似をした。両大師前の路を古びた寺の土塀に添うて左に廻ると、急に賑やかな楽器の音が聞えて並木一つ越した音楽堂の前に大勢の人だかりが見えた。何処か小学校の運動会と見えて赤い旗などをくも手に引き廻した中に、沢山な子供の群れがいた。近づいて見ると本郷区何々と染めぬいた大きい赤旗が立つて、長方形に取り囲まれた見物人の人垣の中に今小さい一群れの子供が遊戯を始めているところであつた。赤旗の下にある一張りの白いテントの内からは、ピアノ音がはずみ立つて響いた。くたびれて女中に負さつた子供は、初めて見る此珍らしい踊りの群れを、呆つけに取られた顔をして熱心に眺めた。直子も何年ぶりかでこんな光景を見たので、子供に劣らぬもの珍らしい心を以て立ち留まつて眺めていたが、五分許りも見ている間に、ふと訳もない涙が上瞼の内から熱くにじみ出して来た。訳も

35 ない涙。直子はこの涙が久しく癖になった。何に出る涙か知らぬ。何に感じたか気のつく前に、ただ流れ出る涙であった。なんでもない朝夕の立ち居の間にも不図この涙におそわれる事があった。子供に乳房を与えながら、その清らかなまじめな瞳を見詰めている内に溢るる涙のとどめられなくなる時もあった。可愛いと云うのか、悲しいと云うのか、美しいからか、清らかな故にか、なんにも知らぬ。今日の前に踊る小さい子供の群れ、秋晴の空の下に、透明な黄色い光線の中をただ小鳥のように魚のように、手を動かしたり足をあげたりしている、ただその有様が胸に沁むのである。直子はそんな心持から女中の肩を乗り出して眺め入っている自分の子供を顧みると、我知らず微笑まれたが、**B** この微笑の底にはいつでも涙に変わる或物が沢山隠れているような気がした。

40 此涙の後に浮ぶ、いつもの甘い悲しみを引いた安らかな心は、落ち着いて絵を見て歩りくのに丁度適した心持ちであった。こう云うと一っぱし見る目のついた人のようだけれども、直子は本統は画の事などは何にも知らぬのである。ただ好きと云う事以外には、家で画の話を書く機会が多いと云う事以外には、画の具の名さえ委しくは知らぬ素人である。陳列替えになった三越を見に行くのと余り大した違いのない見物人の一人である。家を出る時、子供連れで初めから一枚一枚丁寧に見て行つては大変だから、余り疲れぬ内に西洋画の方に行けと云いつかっていたから、直子は其言葉に従つて最初の日本画の右左に美しい彩色の中を通りぬけて奥の西洋画の室に急いで行こうとした。其間にも非常に画の好きな此二つの自分の子供が、朝夕家の人々から書いて貰う、鳩の画、犬の画、猫の画、汽車の画などの粗い鉛筆画に引き代えて、こうした赤や青や黄や紫やいろいろな画の具を塗った美しい大きな画を、どんな顔をして眺めるだろうか、と云う事に注目する事は怠らなかつた。子供は女中の背中からささも真面目な顔つきをして左右の絵の壁を眺め廻した。そしてたまたま自分の知った動物とか鳥とか花とかの形を見出した時には、非常に満足な笑い方をしたが、彫刻の並んだ明るい広い室に這入った時に、女の裸体像を見つけては、

50 「おっばい、おっばい。」  
とさも懐しそうに指しをするのには直子も女中も一緒に笑い出した。まだ朝なのでこうした戯れも誰の邪魔にもならぬ位い入場者のかけは乏しかったのである。どの室もひっそりとして寂しく、高い磨りガラスの天井、白い柱、棕櫚の樹の暗緑色の葉、こ

55 う云うものの中に漂う真珠色の柔らかい燦したような光線の中に、絵画も彫刻も、暫時うるさい「品定め」から免れた悦びを歌い

ながら、安らかに休息してるかのように見えた。「瓦焼き」の前に来た時、直子は此画に対して聞かされた、当て気のない清らかな感情の溢れている、円満な真率な矢張り作者の顔の窺のぞいてる画、と云う様な批評の声を再び思い起して見た。而して彼の碧い

海から、二つの瓦釜(注5)から、左側の草屋根から、其前に働く男から、路ばたの子供から、花畑の紅い花、白い花から、これらすべ

ての上に漲る明るい暖かそうな日光から、その声を探って見て決して失望はしなかった。けれども三十分程前会場の前の小さい

60 踊りの群れを見た時のような奇あやしい胸のせまりはなかった。ただ安らかに気持ちよく見られた。そして不図先日仏蘭西フランスから帰つ

た画家が持つて来て主人の書斎の壁にピンで止めたシャヴァンヌの「芸術と自然の中間」とか云う銅版画を思い出した。「幸ある(注7)

朝」の前に立った時には、直子はいろいろ取り集めたような動揺した感情の許もとにあった。けれどもそれは其画とは全く関係のな

い事で、ただ其画家と其義妹いもつとにあたる直子の古い学校友達との間につながる無邪気な昔話であった。其友達は淑子さんと云つて

直子などよりも二級上にいた姉さん分であったけれども、同じ道筋の通学生で、親しいお仲間であった。数学の飛び抜けて旨いうま

65 人だったので、直子などの二三人の出来ない連中は、少し面倒な宿題でも出ると、もう考えるより先に淑子さんに頼んで解いて

貰っては、それをめいめいのノートに写して行つた。少し頑固な点のある位い生一本なので、時とすると衝突して喧嘩けんかをし

た。そんな時にはむきになってまっ青な顔をして怒る人であった。それでも正直な無邪気な方なので直ぐ仲直りは出来た。

話は或る暑中休暇の事であった。そう云う風な三四人の友達がよつて、午前丈だけいろいろな学科の復習をしたり、編み物をし

たり、又新らしい書物を読んだりする小さい会のようなものを拵つもって、二週間許り有益な楽しい日を作り度いと云う相談が出来

70 た。勿論淑子さんも其お仲間の積りつもでいると、

「私は駄目よ。」

と云う意外な申出もつしいでに皆んな当てが外れた。

「淑子さんが這入みって下さらくちや何にも出来なくなるわ。避暑にでも入いらっしゃるの。」

と聞くと、

75 「左様じゃないんですけども、この夏は午前だけは是非用事があるんですもの。」

と云ってどうしても聞き入れないので、

「初ッはなからそんな方が出ては屹度長続きはしないから、いっそ止めましょうよ。」

とおしまいにウはこんなあてつけがましいお転婆を云って止めてしまった。その日一緒につれ立って帰る時、淑子さんは直子に向むかって、

80 「私全く困ったわ。みんな怒ったでしょうねえ。でもこれからお休みになると毎日あに義兄の家に通わなくちゃならない事があるんですもの。」

と云った。義兄と云うのはこの画家の事であった。直子は油画でも始めるのかとも(注8)って尋ねて見ると、

「まさか。」

とにやにやして、

85 「今に秋になればわか分る事。」

と謎のような言葉を残して別れた。暑中休暇がすんで秋になって、おいおい画の季節が来た時(注9)白馬会が開ひけられた。直子の友達仲間(注9)は例になって毎年淑子さんから貰う招待券でみんなして行って見ると驚いた。淑子さんが画になっているのであった。確か「造花」とか云う題であったと思う。大きな模様の浴衣を着た淑子さんが椅子に腰かけて、何か桃色の花を拵とつてる処の画なのであった。みんな会話の時などを思い当あたった。そして出し抜かれたような、珍らしい賑やかな心持ちになって淑子さんを探すと、  
90 今まで傍そばにいた人が遠くの向うの室に逃げて此方こちうを見てにこにこ笑って立っていた。

直子は今「幸ある朝」の前に立って丁度その頃の事がいろいろ思い出されたのであった。淑子さんはそれから卒業すると間もなくお嫁に行つて、そして間もなく亡くなられた。今はもうこの世にない人である。彼あの「造花」の画のキャンヴァスから此このキャンヴァスの間にはかれこれ十年近くの長い日が挟まっているのだけれども、ちっともそんな気はしない。ほんの昨日の出来事で、今にもあの快活な紅い頬をしたお転婆な遊び友達の群れが、どやどやと此室に流れ込んで来そうな気がする。そして其中に交じる自

分は、ひとり画の前に立つ此自分ではなくって全く違った別の人のような気がする。直子はその親しい影の他人を正面に見据えて見て、笑い度いような冷やかしたいような且かつあわれ憫み度いような気がした。而してふり返る度にうつる過去の姿の、如何いかにも儼なく見すばらしいのを悲しんだ。直子は、こうした雲のような追懐に封じられてる内に、突然けたたましい子供の泣き声が耳に入った。驚いて夢から覚めたように声の方に行くと向うの室の棕櫚かげの蔭に女中に抱かれて子供は大声をあげて泣いている。如何したのかと思つたら、

「あの虎が恐こわいってお泣きになりましたので。」

(注10)

と女中は不折ふせつの大きな画を見ながら云つて、

「もう虎はおりません。あちらに逃げて仕舞いました。」

となだめすかした。直子は急に堪たまらなく可笑おかしくなつたが子供は矢張り、

「とや、とや。」

と云つて泣くので、

「じゃもう出ましよう。虎うううが居いちや大變だからね。」

と大急ぎで出口に廻つた。

(注)

- 1 文部省の絵の展覧会——一九〇七年に始まった文部省美術展覧会のこと。日本画・洋画・彫刻の三部構成で行われた。
- 2 女中——ここでは一般の家に雇われて家事手伝いなどをする女性。当時の呼び名。
- 3 きざ柿——木についたまま熟し、甘くなる柿。
- 4 陳列替えになった三越——百貨店の三越は、豪華な商品をショーケースに陳列し、定期的に展示品を替えていた。
- 5 瓦釜——瓦窯。瓦を焼くためのかまど。
- 6 シャヴァンヌ——ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ(一八二四～一八九八)。フランスの画家。
- 7 「幸ある朝」——絵の題名。藤島武二(一八六七～一九四三)に同名の作品がある。この後に出てくる「造花」も同じ。
- 8 もって——「思つて」に同じ。
- 9 白馬会が開らけた——白馬会は明治期の洋画の美術団体。その展覧会が始まったということ。
- 10 不折——中村不折(一八六六～一九四三)。日本の画家・書家。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 ～ 14。

(ア) 呆<sup>あ</sup>っけに取られた

12

- ① 驚いて目を奪われたような  
 ② 意外さとまどったような  
 ③ 真剣に意識を集中させたような  
 ④ 急に眠気を覚まされたような  
 ⑤ 突然のことになれしそうな

(イ) 生<sup>き</sup>一本

13

- ⑤ ④ ③ ② ①  
 強 活 勝 純 短  
 情 発 手 粋 気

(ウ) あてつけがましい

14

- ⑤ ④ ③ ② ①  
 いかにも皮肉を感じさせるような  
 ② 遠回しに敵意をほめかすような  
 ③ 暗にふざけてからかうような  
 ④ あたかも憎悪をにじませるような  
 ⑤ かえって失礼で憤みがないような



問2 傍線部A「誠に物珍めずらしい楽しい事が急に湧いたような気がして」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も

適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① この秋はそれまでの数年間と違って体調がよく、籠を持ってどこかへ出掛けたいと考えていたところ、絵の鑑賞を夫から勧められてにわかに興味を覚え、子供と一緒に絵を見ることが待ち遠しくなったということ。
- ② 長い間患っていた病気が治り、子供も自分で歩けるほど成長しているので一緒に外出したいと思っていたところ、翌日は秋晴れのようなだから、全快を実感できる絶好の日になるとふと思いついて、心が弾んだということ。
- ③ 珍しく秋に体調がよく、子供とどこかへ出掛けたいのに行き先がないと悩んでいたところ、夫の話から久しぶりに絵の展覧会に行こうとはたと思いつき、手頃な目的地が決まって楽しみになったということ。
- ④ 籠を持って子供と出掛けたいと思いながら、適当な行き先が思い当たらずにいたところ、翌日は秋晴れになりそうだから、展覧会の絵を見た後に郊外へ出掛ければいいとふいに気がついて、うれしくなったということ。
- ⑤ 展覧会の絵を早く見に行きたかったが、子供は退屈するのではないかとためらっていたところ、絵を見た後にどこか静かな田舎へ行けば子供も喜ぶだろうと突然気づいて、晴れやかな気持ちになったということ。

問3

傍線部B「」の微笑の底にはいつでも涙にかわあるもの変わる或物が沢山隠れているような気がした」とあるが、それはどういうことか。

その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16。

- ① 思わずもらした微笑は、身を乗り出して運動会を見ている子供の様子に反応したのだが、そこには病弱な自分がいつも心弱さから流す涙と表裏一体のものがあると感じたということ。
- ② 思わずもらした微笑は、小学生たちの踊る姿に驚く子供の様子に反応したのだが、そこには無邪気な子供の将来を思う不安から流す涙につながるものがあると感じたということ。
- ③ 思わずもらした微笑は、子供の振る舞いのかわいらしさに反応したのだが、そこには純真さをいつまでも保ってほしいと願うあまりに流れる涙に結びつくものがあると感じたということ。
- ④ 思わずもらした微笑は、幸せそうな子供の様子に反応したのだが、そこにはこれまで自分がさまざまな苦勞をして流した涙の記憶と切り離せないものがあると感じたということ。
- ⑤ 思わずもらした微笑は、子供が運動会を見つめる姿に反応したのだが、そこには純粋なものに心を動かされてひとりでにあふれ出す涙に通じるものがあると感じたということ。

問4 傍線部C「こうした雲のような追懐に封じられてる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

① 絵を見たことをきっかけに、淑子さんや友人たちと同じように無邪気で活発だった自分が、ささいなことにも心を動かされていたことを思い出した。それに引きかえ、長い間の病気が自分の快活な気質をくもらせてしまったことに気づき、沈んだ気持ちに陥っている。

② 絵を見たことをきっかけに、淑子さんをはじめ女学校時代の友人たちとの思い出が次から次へと湧き上がってきた。当時のことは鮮やかに思い出されるのに淑子さんはすでに亡く、自分自身も変化していることに気づかされて、もの思ひから抜け出すことができずにいる。

③ 絵を見たことをきっかけに、親しい友人であった淑子さんと自分たちとの感情がすれ違ってしまった出来事を思い出した。淑子さんと二度と会うことができなくなった今となっては、慕わしさが次々と湧き起るとともに当時の未熟さが情けなく思われて、後悔の念に胸がふさがれている。

④ 絵を見たことをきっかけに、女学校の頃の出来事や友人たちの姿がとりとめもなく次々に浮かんできた。しかし、すでに十年近い時間が過ぎてしまい、もうこの世にいない淑子さんの姿がかすんでしまっていることに気づいて、懸命に思い出そうと努めている。

⑤ 絵を見たことをきっかけに、淑子さんが自分たちに仕掛けたかわいらしい謎によって引き起こされた、さまざまな感情がよみがえり、ふくれ上がってきた。それをたどり直すことで、ささやかな日常を楽しむことができた女学生の頃への感覚を懐かしみ、取り戻したいという思いにとらわれている。

問5 本文には、自分の子供の様子を見守る直子の心情が随所に描かれている。それぞれの場面の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

① 子供が歩き出すことを直子が想像したり、成長していたずらもするようになったことが示されたりする場面には、子供を見守り続ける直子の心情が描かれている。ここでは、念願だった秋のピクニックを計画する余裕もないほどに、子育てに熱中する直子の母としての自覚が印象づけられている。

② 「かアかアかア。」と鴉の口まねをするなど、目にしたものに子供が無邪気に反応する場面には、子供とは異なる思いでそれらを眺める直子の心の動きが描かれている。ここでは、長い間病床についていたために、ささいなことにも暗い影を見てしまう直子の不安な感情が暗示されている。

③ 運動会の小学生たちを子供が眺める場面には、その様子を注意深く見守ろうとする直子の心情が描かれている。ここでは、直子には見慣れたものである秋の風物が、子供の新鮮な心の動きによって目新しいものになっている様子が表されている。

④ 初めて接する美術品を子供が眺めている場面には、その反応を見守ろうとする直子の心情が描かれている。ここでは、美術品の中に自分の知っているものを見つけた子供が無邪気な反応を示す様子を、周囲への気兼ねなく楽しむ直子ののびやかな気分が表されている。

⑤ 「とや、とや。」と言って子供が急に泣き出した場面には、自分の思いよりも子供のことを優先する直子の心の動きが描かれている。ここでは、突然現実に引き戻された直子が、娘時代はもはや遠くなってしまったと嘆く様子が表されている。

問6 この文章の表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 

19
----

 ・ 

20
----

 。

- ① 語句に付された傍点には、共通してその語を目立たせる働きがあるが、1行目「あ、ん、よ」、24行目「あ、ら、わ」のように、その前後の連続するひらがな表記から、その語を識別しやすくする効果もある。
- ② 22行目以降の落葉や46行目以降の日本画の描写には、さまざまな色彩語が用いられている。前者については、さらに擬音語が加えられ、視覚・聴覚の両面から表現されている。
- ③ 38行目「透明な黄色い光線」、55行目「真珠色の柔らかい燦いぶしたような光線」のように、秋晴れの様子が室内外に差す光の色を通して表現されている。
- ④ 43行目「直子は本統ほんとうは画えの事などは何にも知らぬのである」、44行目「画の具の名さえ委くわしくは知らぬ素人である」は、直子の無知を指摘し、突き放そうとする表現である。
- ⑤ 55行目「暫時うるさい『品定め』から免れた悦よろこびを歌いながら、安らかに休息してるかのように見えた」は、絵画や彫刻にかたどられた人たちの、穏やかな中にも生き生きとした姿を表現したものである。
- ⑥ 直子が、亡くなった淑子のことを回想する68行目以降の場面では、女学生時代の会話が再現されている。これによって、彼女とのやり取りが昨日のことのように思い出されたことが表現されている。